



こんなわたしでした

常務理事・前練馬区立向山保育園園長

安川信一郎

将来は福祉関係の仕事に就きたいと、名古屋にある日本福祉大学に進みました。初めての親元を離れて

の一人暮らし、解放感もあり様々なことにチャレンジしたい思いが強く1年のクラスの時に代議員(クラス委員?)に手を挙げていた自分がありました。

1年間は授業には出ていたものの、2年からはサークル活動、3年からはゼミ活動とバイトに明け暮れ授業にはあまり出ず、試験はサークルの仲間のノートをコピーして何とか卒業することができました。

いよいよ、就職しないとまずいという事で、養護学校の教員にチャレンジしましたがすべて惨敗。そんな時、ゼミの教授から、多摩福祉会で保母を募集しているから受けて

みればと声を掛けられ、保育士資格もないまま、子どもと過ごすのも悪くないかなという軽い気持ちで面接を受け、保母として働くことになりました。

当時は、現在の「保育士」ではなく「保母」。保育の仕事は「女性がするもの」。でも両親は、自分がやりたいことをすればと応援してくれました。今でも感謝しています。男性のため資格は取れず無資格で働くことになりました。

1年目は2歳のトコトコ組(1ヶ月齢の低いクラス)。大学時代に保育の授業を受けたことも、保育所実習の経験もないまま、子ども達と向き合う日々が続きました。まだ複数担任だったので、助けてもらいながら1年が過ぎていきました。

2年目は2歳からの持ち上がりナゼナゼ組。低月齢18人の担任

連絡先

〒155-0031
東京都世田谷区北沢 2-36-9-4F
社会福祉法人多摩福祉会
法人事務局
◆Tel. 03-6804-8345
◆Fax. 03-6804-8347
tamafukushikai@gmail.com

今号の目次

- 1p こんなわたしでした
- 2~3p 50周年を祝う会
- 4~8p 法人合研分科会報告

は「なんで、片付けないの!」と自分の気持ちだけで子どもを動かそうとしていました。

今でこそ、職員には子どもの気持ちに寄り添った保育を、子どもの思いを共有しようと話していますが、その当時は、自分の思った通りに子ども達を動かす保育をしていました。ですから保育も楽しくなく、保育園に行くのがイヤで、登校拒否ならぬ出勤拒否になっていました。

保育園での虐待がクローズアップされています。あつてはいけないことですが、一つ間違えば自分も同じようなことをしていたのではと考えてしまいます。すべてを個人の責任に帰すのではなく、様々な要因(職場関係、制度問題など)を含めて私たちが行わなければならぬことがたくさんあると思います。

多摩福祉会で働きたい半世紀近くになります。本当に様々な失敗(挙げればきりがありません)をしてきましたが、職場の仲間や保護者、そして何よりも子どもたちに支えられている今の自分があるように思います。

社会福祉法人 多摩福祉会
「創立 50 周年をみんなで祝う会」を開催しました



好天に恵まれた2022年11月19日、新宿のホテルにて、「創立50周年をみんなで祝う会」が開催されました。

第一部は各施設の職員、また全国からご参加のみなさんを Noon で繋いで法人合同研究集会を行い、講演や実践報告を行いました。

第二部は法人50年の歩みをビデオで振り返ったり、歴代園長やみなさんの貴重なお話を伺ったりと充実した時間を過ごしました。

直前まで新型コロナウイルスに翻弄され、感染防止に細心の注意を払いながらの開催となりましたが、先人たちのスピリッツを改めて胸に刻み、新たな50年へと踏み出す一歩となりました。

また、今までの歩みをまとめた多摩福祉会50年誌も完成し、招待客のみさまにお配りしました。

第 1 部



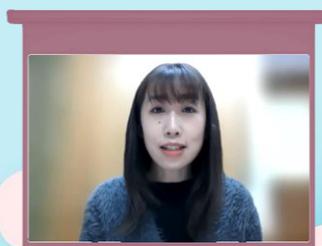
理事長 垣内国光挨拶



穴戸健夫先生ご挨拶（愛知から）



大宮勇雄先生総評（福島から）



こぐま保育園実践報告
(多摩市から)



貝取学童クラブ実践報告



全保連副会長
美方伸子様



顧問・元理事長
伊藤亮子



元こぐま保育園園長
谷まち子様



永山第3公園にて



1972年、駅も入らなかった農村に
900戸規模の大規模な保育園が多摩市より企画された。

第2部



創立(落成)記念 1973年5月1日
なほ...どうして...どうする? 問いあう保育のはじまり



働くお母さんが安心して預けられ
子どもたちが生き生きと育ち、
職員が働きやすい民主的な職場に、目標を掲げ
1973年 こぐま保育園 開園!



保育園保護者
山本恭平様



初代園長 庄司豊子先生
お母さんたちがあきらめず、こぐま保育園づくりを目指す



1976年、給食化実施
長時間保育の子どもたちのお腹がすくようになった。
お母さんたちが保育で、他の保育室に預ける「二重保育」が常態化していた



初代理事長 浦辺史先生
真に子どもが主体となる保育を目指し、労働者のため保育園をつくる
戦前は小学校教師をつとめ、のちに社会福祉の研究・教育者となり、
多摩市立保育園の設立に尽力された。



常務理事
安川信一郎



【向山保育園】

向山保育園では、法人設立 50 周年を受け、向山の歴史も振り返ってみようということになりました。そこで『向山保育園、17 歳になりました。』と題をつけ、12 月に向山合研を行いました。向山保育園のあゆみとして 17 年間の年表を作成したり、職員には「新人だった頃の自分へ」と題し、当時の自分へ向けて、悩んでいたことや励ましの言葉を手紙に書いてもらったりしました。

当日は全体会と分散会を設けました。全体会では向山保育園の歴史を振り返るスライドショーを流したり、「初年度を支えた猛者たちの話」として、初年度から向山保育園を支えてきた職員の 3 人に代表して話をしてもらったりしました。話では聞いていたことを、実際にスライドショーの写真でみて実感する職員もいました。狭い園庭の中にたくさんの遊具があったため、撤去したことで少しでもたくさん園庭を走りまわれるようになったことや、食事もステンレス製の食器を使っていたことを知り、今当たり前にある環境は、当時の職員が、子どもにとって何がいいのかということなどをたくさん話し合いながら変えてきてくれたことなのだ改めて実感しました。

初年度から支えてきた職員は、直営から委託に変わったことでの保護者との関係や、続けてきたからこそわかった保護者の気持ちなど、初年度だったからではなく今の保育でも大事にしてい



なければいけないことを話してくれました。

分散会では、全体会を受けての話や、事前に書いた新人の頃の自分への手紙の話しながら各グループで話し合いをしました。当たり前のことですが、キャリアの長い職員にも新人時代があり、そんな悩みがあったのかと驚く場面もありました。初年度から経験している職員もいれば、かたやコロナ禍に入職したため職員の顔が中々わからなかったという職員もいて、改めて色々な世代が混在する職員集団なのだということを感じました。

向山合研の内容を決めていく中で、このコロナ禍でも子どもたちのことは日々の会議や総括等で話し合うことができています。しかし、黙食の徹底等から、職員同士の話す場がなくなってきた



いるのではないかとの話が出ました。昔は休憩室で職員同士たわいもない話で盛り上がったたり、子どものちょっとした可愛いかった話だったりをたくさんしていました。それが職員同士のコミュニケーションになっていて、日々の保育にも繋がっていたのだと思います。

今回少しではありますが、職員同士で思い出話に花を咲かせてみたり、新人も経験のある職員も悩みを共有したりと、楽しく話をし、たくさん笑い合うことができました。

職員同士のコミュニケーションの大切さや、今の向山保育園が 17 年積み上げ続けてきた中で大切にしてきたこと、守ってきたことを、これから私たちが繋げていかなければいけない、それぞれがそんなことを感じた会となりました。

【こぐま保育園】

こぐま保育園では園内の新型コロナウイルス感染状況により、予定を変更してセクシオンごとの話し合い(グループ討議)を行いました。各セクシオン3名〜4名程度の少人数での話し合いとなりましたが、少人数ならではの和やかな雰囲気で行うことができました。

まず、自己紹介も兼ねて「自分のこぐま史を振り返ってみて、楽しかったこと・大変だったこと」というテーマで一人ずつ話をしました。若い職員が多くなっていることもあり、一年目ならではの子どもや父母との関係づくりの難しさ、そこをどう乗り越えたか、今振り返ってみての気持ちなどを話してくれた職員が多くいました。「みんな一年目は苦労するよね

〜!」と世代関係なく共感し合うことができませんでした。こぐま卒園児の職員からは、「(当時を振り返って)小さい子のお世話をす



く楽しんでいた」「小さい子を妹のように可愛がっていた記憶は今でも残っている」「在園時を振り返って異年齢保育の良さを感じ、異年齢保育が好きでこぐまに就職した」という話を聞くことができました。



続いて、午前中のレセプションの内容を受けての話し合いを行いました。多く出たのは、50年という歴史の重み。50年間、子どもを第一に考えて、みんなで作り上げてきたということが実感できたという声が多く聞かれました。実践報告もとてもわかりやすく参考になりました。実践報告はいつもそうですが、今回も自分たちとはまた違った保育のやり方を見られたことで、どうやったら自分たちの保育にもいかせるかを話し合うことができ、有意義な時間となりました。

今回、法人の歴史を振り返り、日常の忙しさの中で過ぎ去ってしまうような小さなことにも意味があるのだと改めて気付くことができました。

また、こぐまの異年齢で育った子どもたちが同窓会や父母、職員として帰って来てくれることで、こぐま保育園が卒園した後も大切な居場所となっていることを実感し、これからもこぐまの異年齢保育を守っていきたいと思いました。

50年という歴史を振り返り、自分たちの保育を振り返ることで、自分たちの保育に少し自信も持て、また明日から頑張ろうという気持ちになることができました。



2024年4月 練馬区に新園が開園します

保育士さん募集!!

新しい園でいっしょに保育を創造しませんか?

お知り合いの方をぜひご紹介ください。
詳細はホームページまたは
法人事務局 (03-6804-8345) まで

【砧保育園】

園長 西田 健太

今年度の法人合研は、施設毎に内容も日時も計画することとなりました。砧保育園では、法人設立50周年記念レセプションの後に園のホールにて伊藤亮子顧問よりお話しいただくこととしました。また伊藤顧問に加えて、レセプションに参加していた元管理者である梅澤先生、永田先生、目黒先生もお誘いすると、当日急遽であったにも関わらず快諾していただきました。現役職員からすると、まさに「レジェンド」である大先輩方のお話を聞ける貴重な機会となりました。

伊藤顧問からは、1〜5歳児の異年齢保育に移行した経過を中心にお話していただきました。高度経済成長の煽りを受けて保護者の働き方が変化し、その影響で子どもたちを取り巻く環境も大きく変化していったこと。時代と共に核家族化や地域の繋がりの希薄化が進行し、昔ながらの子ども集団で遊ぶ環境が乏しくなってきたこと。それらの状況の変化が子ども達の育ちに大きな影響を及ぼし始め、意図的に異年齢集団での生活を保障する必要があると感じるようになったということでした。しかし、提案までは10年程かかったとのこと。ようやく移行となり、子どもたちの家庭での姿も大きく変化



し、「きょうだいで喧嘩ばかりしていたのに、仲良く遊ぶようになりました！」と保護者からも反響があったとのことでした。「きょうだいグループ保育」の意義を改めて確認する機会となりました。

他の先生からは、「異年齢では5歳児と相談して一緒に生活を作ることができるといけど、同年齢だと低年齢児を自分一人で見ないといけない。どうやったらいいかも分からなくなった」というお話もあり、経験豊かな大先輩でもそのような感じるのだと新鮮に響きました。職員からは「社会情勢も含めてお話を聞けて、すごく分かりやすかった」「子どもも保護者も変わっていくこと等、具体的なお話が聞けたためになった」等の感想があり、大変学びの多い機会となりました。

した。「もっとお話を聞きたい」という声も上がっている。今後計画していきたいと思えます。

異年齢保育は毎日の「活動」を豊かにするというよりも、「生活」そのものを豊かにすることに本質があると考えています。多様性を認めあうことが大切だという社会的な価値観が根付き始めている今、異年齢保育で育ちあうことはまさにそこに繋がる感覚を無意識に養う取り組みなのではないでしょうか。「違うけどいい」ではなく、「違うからいい」という価値観。それが異年齢保育の大きな魅力の一つなのではないかと感じていきます。

今年度の法人合研を受け、今後も社会的な背景を捉えながら、その時その時の子どもたちにおいての最善の保育を追求していく必要があるのだと、改めて学ばせていただきました。お話しくださった先生方、本当にありがとうございました。



【上北沢こぐま保育園】

上北沢こぐま保育園は園に集まって全体会にオンラインで参加した後、午後は外部研修で実践報告をした職員による、異年齢保育についての発表を聞いてグループに分かれて討議しました。

まず全体会では、浦辺先生をはじめ歴代の先生方の言葉や信念を聞いて、多摩福祉会は色々な方たちの思いがあつて築かれてきたことを改めて実感しました。同時にその経緯を知ったことで、これからは私たちが継承していく役割があるという責任も感じました。3つの理念を当初から変わらず大切にしていることも知り、私たちも想いを受け継いで大切にしながらお互いに学び続けていきたいです。

また、お休みの日だったにも関わらず在園児の保護者の方々にもわざわざ足を運んでいただいたり、冊子にもお祝いのメッセージを多数いただいたりしました。お祝いしていただいたことが嬉しく、また上北沢こぐま保育園開園時から支えてくださっている保護者が「一緒に作っていいこう、進んでいいこう」と思ってくださいているのを感じました。

園内での発表と分散会では、特に異年齢保育についてのテーマで話しました。異年齢を取り入れている保育園は『学年別保育での育ちの限界を感じての異年齢保育に踏み込んだ園』（教育的な目線）と『家庭的な第二のおうち・兄弟で同じ保育

園・クラスに通える安心感を大事に考えての異年齢保育』（福祉の観点）の2つに分かれています。上北沢こぐま保育園も2つ目の理由を大



切にして異年齢保育を行っており、浦辺先生も福祉を大事にしていたという話を聞いてはいましたが、歴史の部分あまり振り返る機会がありませんでした。今回お話を聞くことができ、今の異年齢保育を当たり前と思わずに、異年齢保育の良さを自分たちの言葉で自信を持って発信していきたいと改めて思いました。また、異年齢保育では年齢ごとの発達を知った上で、年齢ごとに分けないことも大切だと感じました。

グループワークでは『これからの保育でやってみたいこと』を話し合いました。

◆ 子どもたちとやってみたいこと

○ お米を育ててみたい（食の意欲を深めて幅を広げていきたい）

○ 芋掘りしてみたい・畑を借りたい（クツ

◆ 職員がやってみたいこと

○ キングや制作などに繋げていきたい）
 ○ どうやってできるの？どのように作られているの？と体験したり考えたりする活動をしたい（失敗からも考察する力をつけていけるように） など・・・

○ みんなの保育の良いところを伝え合いたい（残るものだと振り返りができる、励みになる）

○ 全体で行う誕生会を復活させたい（おうちごとに繋がり合うことを大切にしたい）
 ○ 地域の中の上北沢こぐま保育園になりたい など・・・

今回の50周年記念での学びをもとに、子ども・保護者・職員が繋がりがあって、これからの保育をより深め、充実させていきたいと思えます。



【学童クラブ】



学童クラブでは『創立50周年をみんなで祝う会』当日に職員がまとまって研修に参加できなかった為、12月6日に有期契約職員を含む24名で分散会を実施しました。職員は、事前に50年誌、合研の冊子、レセプションの動画を各自見ただで分散会に臨みました。

永山小学学童クラブを多摩市より受託してから4つ目の貝取小学学童クラブを受託した今日までを知る佐藤理事と各学童クラブ施設長、勤続10年を迎えた職員から、法人の保育理念を大切にしてきたことを実践する上での工夫や苦労、グループ制を取り入れた経緯などを聞きました。

その後2つのグループに分かれ、まず職員が印象に残ったことや感想を発表しました。多かった意見は、施設長たちの受託からこれまでの運営上の葛藤や苦悩、学童保育で当たり前のことのように難しい「子どもを真ん中にして考える」と、常勤職員と有期契約職員がコミュニケーションをとりながら、職員の主体性を大切にする姿勢などが受け継がれていることでした。

また、全国でも珍しいグループによる育成についても意見が交わされました。少人数によるグループの中では職員と子どもの距離感が密になる

ため信頼関係が築きやすくなり、子どもには自分の居場所ができて意見を言える環境になったことが、良い点として挙げられました。他にもグループによってちよつとした活動の違いがあっても良いという考え方が、子ども達にとって相手の考え方や受け止め方の違いを受け入れる土台になっているのではないかという意見もありました。さらに、同じ法人内で幼児期から児童期まで子ども達の成長を見守ることができるようさや、学童保育のこれまでの運営は、有期契約職員の力を含めた総合力がなければできなかったことなどを再確認しました。

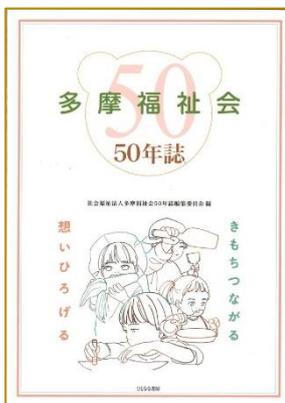
これからも子ども達にとって学童クラブが放課後のおうち(居場所)として充実するよう、試行錯誤しながら育成をしていきたいという意見や、今後は地域の子どもたちや大人と関われるような活動を考えていきたいという意見もありました。研修委員としてはもう少し時間をかけてこの点を話し合いたいと思うところでした。

今後も継続して、機会があるごとに話し合いを重ね、職員一同、引き続きチームとして子どもたちの力を信じて実践を重ねていきたいと思えます。



- 広報委員会 ●
- 中本 琢也
 - 江藤 龍之介
 - 小林 君江
 - 岡田 織

多摩福祉会 50年誌が発行されました。



発行：ひとなる書房
B5判 208頁 定価 2,200円+税

墓参を行いました

祝う会前の澄み切った秋晴の日、創設者浦辺史先生、こぐま保育園初代園長庄司豊子先生の墓参を行いました。

